

宮前町浴場：継続的支援の理由

メイボン・レズリー

オープン大学

工学部

夕張市清水沢地区にある宮前町浴場は、夕張、そして広く見れば北海道の炭鉱にまつわる重要な文化遺産である。

夕張市では 30 年前に炭鉱活動は終了したが、炭鉱のレガシー（遺産）の影響を受け続けている。現在進行中の財政再建、高齢化と人口減少、より多くの人口を想定して設計された建物やインフラを管理する必要性などの要因はすべて、地方自治体や地域社会が繁栄を続けるための課題となっている。

世界の他の産炭地も同様の課題に直面している。こうした理由から、「公正な移行」という考え方が生まれた。「公正な移行」とは、これまで化石燃料に踏まえた産業に雇用と経済的利益を依存してきた人々や地域が、古い産業が閉鎖されても取り残されないようにすること、そして持続可能な社会を発展させるために適切な支援が提供されるようにすることである。

日本と国際的に行われた研究によると、公正な移行の一環として地域のアイデンティティと誇りを守ることは、地域社会が回復力を維持し、新たな社会的・経済的活動を展開する上で特に重要であることがわかっている¹。炭鉱のアイデンティティは誇りの源となり、社会的、経済的、環境的な課題に対応するための行動を地域社会に起こさせることができる。英国のブリティッシュ・アカデミーの資金援助を受けたプロジェクトの一環として夕張で行われた調査では、炭鉱の記憶を維持するためのコミュニティ活動に参加することが、地域コミュニティを維持するために重要であることがわかった。この調査では、清水沢の炭鉱住宅のような採鉱に関連した建物が、夕張に住む人々にとって、互いに集い、つながるための重要な空間であることもわかった²。

特に重要なのは、宮前町浴場が夕張の炭鉱に関連する有形・無形の文化遺産を支えていることだ。有形文化遺産とは、文化や歴史に関連する物理的なものを指す。無形文化遺産とは、文化や歴史に関連する伝統、慣習、行為を指す。宮前町浴場は無形文化遺産であり、炭鉱時代に夕張に住んでいた人々がどのような生活をしていたのか、どのような地域のつながりがあったのかを体験することができる。

そのため、宮前町浴場は清水沢、ひいては夕張の人々にとって重要な集いの場であり、夕張に残る数少ない採鉱関連の文化遺産でもある。浴場を保存することは、夕張の長期的な公正な移行を可能にし、国内外からの訪問者が夕張を訪れ、公正な移行を支える文化遺産の役割について学ぶことを可能にする重要な要素である。

¹ <https://doi.org/10.5334/bc.395>

² <https://www.thebritishacademy.ac.uk/publications/just-transitions-in-japan-japanese-translation/>

Miyamae-cho bath house: justification for continued support

Leslie Mabon, School of Engineering and Innovation, The Open University

The Miyamae-cho bath house, located in the Shimizusawa area of Yubari City, is an important piece of cultural heritage related to coal mining in Yubari and Hokkaido more widely.

Although coal mining activities ended three decades ago in Yubari, the city continues to be affected by the legacy of mining. Factors such as ongoing financial reconstruction, an ageing and declining population, and the need to manage buildings and infrastructure designed for a much larger population all create challenges for the local government and local society to continue to thrive.

Other coal-producing regions globally have faced similar challenges. It is for these reasons that the idea of a just transition has developed. A just transition is about ensuring that people and places who have previously relied on coal mining for employment and economic benefit are not left behind as old industries are shut down; and that appropriate support is provided to develop a sustainable society.

Studies carried out in Japan and internationally have found that it is especially important to protect a sense of local identity and pride as part of a just transition, as this can help a community to remain resilient and develop new social and economic activities³. A coal mining identity can be a source of pride, and can motivate a community to take action to respond to social, economic and environmental challenges. Research undertaken in Yubari, as part of a project funded by the British Academy in the UK, has found that participating in community activities to sustain the memory of coal mining are important for keeping the community together. This research has also found that buildings associated with mining, such as the coal mining housing in Shimizusawa, are important spaces for people living in Yubari to gather and connect with one another⁴.

What is especially important is that the Miyamae-cho bath house sustains both tangible and intangible cultural heritage associated with coal mining in Yubari. Tangible cultural heritage refers to physical objects associated with culture and history. Intangible cultural heritage refers to traditions, practices and actions that are associated with culture and history. The Miyamae-cho bath house reflects intangible cultural heritage, as it allows us to experience the kind of lifestyle and community connection that people living in Yubari during the coal mining period would have had.

The Miyamae-cho bath house is therefore an important gathering point for people in Shimizusawa and Yubari more widely; and is also one of the few remaining pieces of cultural heritage in Yubari related to mining. Preserving the bath house is an important part of enabling a long-term just transition for Yubari, and enabling visitors from Japan and internationally to visit Yubari and learn about the role of cultural heritage in supporting a just transition.

³ <https://doi.org/10.5334/bc.395>

⁴ <https://www.thebritishacademy.ac.uk/publications/just-transitions-in-japan-japanese-translation/>

2025年2月23日

第20回住まいのまちなみコンクールにおける住まいのまちなみ賞、ご受賞おめでとうございます。エコミュージアムとは、地域の全体性がとても重要で、この地域が炭鉱街であったことを示す社宅と、浴場などの更生施設が存在していることが、今後の夕張市の交流人口を減らしていかないためにも重要だと思えます。現在、全国で公営住宅の目的外使用や用途廃したものの、有効活用を官民挙げて考えていくことが大変活発に行われています。例えば、旧横須賀市田浦営月見台団地のリノベーションなどは参考となるかなと考えております。

大月敏雄

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授

第20回 住まいのまちなみコンクール 審査委員長

市営宮前町浴場閉鎖方針の撤回を求めます。

文化と共に活動する私にとって、地域の文化の灯火がふと消えてしまう瞬間を度々目にしてきました。

2016年から夕張で制作させてもらっている映像作品の中では、たくさんの地元の方に小学校時代についてインタビューをしています。心が温まる物語がある一方、ふるさとの風景が多かれ少なかれ失われていく現実を心で痛めている姿もみてきました。どんなに長い歴史があっても、そこにどれだけの人が関わっていたとしても文化は一夜にして失われることが可能な儚いものです。私は清水沢宮前町の地域がその歴史とともに積み上げてきた地区共同浴場文化を次世代のためにも残しておくべき夕張の財産だと思っています。共同浴場があるという地域住民の安心感、煙突からもくもくと登る湯気、曇りガラスから漏れる優しい光をどうか守ってください。

2025年2月24日 菊池史子（アーティスト）

夕張市御中

市宮宮前町浴場の存在は現代のこれからの日本の未来の為に大変意義のある取組だと考えます。

- ①日本全体が未来に対して不安を感じながらも行動に繋がらないのは危機感になっていない為と考えます。
- ②夕張市の皆さんはその危機感の中で皆さんがもがき頑張って来られた象徴的な場所です。結果、市を出る事を選択された方も多いと思いますし残った方々には残念ながら諦観も見受けられません。
- ③その様な中で一般社団法人の清水沢プロジェクトは外から観ていてとても稀有で素晴らしい活動です、更に市役所職員の中にもへこたれずに悪戦苦闘する職員の方も観て来ました。
- ④高齢化人口減少社会で国会や選挙を見ている票につながるサービスをととても雑に提供し、国民はそれでももっともっとと要求し足りなければ子や孫のお金を使っているのが現在の日本社会の現実です。
- ⑤石破総理が掲げている地方創生「楽しい日本・地方」とは本当の意味で地域のおひとりお一人が当事者となり、今と未来に向けた協力や共創する事ではないでしょうか。
この危機感を共有した上でそれを克服する為に地域が一丸となって協力し良い汗をかく、この関係性が信頼と承認といった自らの存在の手触り感となり幸福感だと思います。
- ⑥共同浴場、裸の付き合いは日本の文化です、各家庭にお風呂のある東京の各区の取組みも高齢者は100円程度で年間50回程度入浴が出来るようなサービスを提供しコミュニティと浴場の維持継続に貢献しています、有難く感じています。
- ⑦この度の宮前町浴場の存続は市民の皆さまが当事者となり自分達の想いと連携と行動により結果を出せるんだといった成功体験と自信に繋がなくてはならないのではないのでしょうか？
- ⑧その様な本気の活動にはお金も集まると思いますし、夕張の頑張りや成功は他の市町村の皆さんに大きな勇気付けと動機づけになると考えられます。
是非頑張って下さい！

金井政明（株式会社良品計画 顧問）

2025年2月26日

関係各位

北海道教育大学教育学部函館校

講師 平井 健文

市営宮前町浴場の閉鎖に関する意見書

掲題の件について下記のとおり意見を申し上げます。

記

宮前町浴場は、炭鉱操業時からの地域の記憶とコミュニティの形を現在に留める重要な施設であり、炭鉱遺産の保存に加えて観光の観点からもその存続が重要であると考えます。以下、2点に大分してその理由を説明いたします。

1. 「生活の記憶」を留める貴重な炭鉱関連施設であること
2. 夕張市において現存する数少ない「本物の」炭鉱関連施設であること

初めに1について申し上げます。産業遺産は、直接的に生産に関わった施設のみを指すわけではなく、産業に関連する生活文化も産業遺産に位置づけられます。身近な例として、日本遺産「炭鉄港」事業の中で推進される「炭鉄港めし」があります。

生活文化の保存・継承は、地域社会にとって大きな意味を持ちます。なぜなら、生活文化は男性労働者のみではなく、地域内の広範な住民層が直接的な経験を有するからです。そのため、産業（炭鉱）に関する様々な声や記憶を内包します。生活文化を残すことは、地域の歴史の物語を豊かなものにするだけでなく、多様な住民層に産業遺産保存の実践への参画を促し、往時から今に連なるコミュニティのあり方を明示することにもつながります。

実際に、兵庫県の明延鉱山跡の第一浴場がコミュニティ施設として活用されているほか、台湾の瑞三炭鉱跡でも共同浴場が博物館に転用されています。ただ、これらはすでに浴場としての機能は失われており、宮前町浴場の本来の機能を残しつつコミュニティの核としていく取り組みは、より「本物さ」（後述）を保ったまま、炭鉱に由来する生活文化やコミュニティを「生きたもの」（＝リビング・ヘリテージ）として残していく実践と言えます。

続いて2について申し上げます。産業遺産は観光資源、また交流人口を創造する資源であるとも考えます。歴史文化に高い関心を有する観光者層は、①「本物」を志向すること、②その資源の背景にある知識までを探究しようとする事、③ガイドツアーへの参加意欲が高いことが、既往の調査で明らかになっています。夕張市に現存する炭鉱関連施設が少ない中で、宮前町浴場は「本物」の施設であり、引き続きコミュニティの拠点として使用されることで「本物」であり続けます。また、宮前町浴場を拠点として行われる清水沢エコミュージアムの実践は、高次化した意欲・関心を持つ観光者層に対する貴重な資源ともなります。

以上のように、宮前町浴場の存続は、夕張市にとっての大きな意義があるものと考えます。なお、本意見書は所属機関を代表して提出するものではなく、一研究者として提出するものであることを申し添えます。

以上

2025年2月27日

宮前町浴場の価値について

北海道大学名誉教授
特定非営利活動法人歴史的・地域資産研究機構代表理事
角 幸博

日本遺産「炭鉄港」の構成要素には、空知の炭鉱遺産、室蘭の工場景観、小樽の港湾そして各地の鉄道施設など、採炭施設や生産・流通システムに関わるものが多くを占める。

「炭鉄港」を含めた産業遺産の価値評価指標としては、A.産業史的価値、B.生活文化価値、C.歴史的価値、D.美的価値、E.景観的価値、F.思い入れ価値、G.活用価値などが挙げられる。

宮前町浴場は、1971(昭和46)年に北炭(北海道炭礦汽船株式会社)が、宮前町コンクリートブロック造行員住宅建設に合わせて整備した地区浴場である。前述の価値指標のB.生活文化価値やF.思い入れ価値に相当する存在であり、「炭鉱生活やコミュニティを語るもの」として貴重であり、大きな浴槽を備えたかつての炭鉱浴場の状況を直接的に体感することができる施設でもあり、また地域住民にこれまで愛されてきた、思い入れ価値の高い施設ということもできる。「炭鉄港」の構成文化財を通観すると、地域のコミュニティーや地域生活を支えてきた構成要素があまりにも少ない状況であり、その点でも本施設の存在意義は大きいといえる。

本施設の生活文化的価値を後世に伝えるとともに、「生きた炭鉱遺産」として、官民あげて今後のあり方や方向性について、限られた時間内に、知恵を出し合うことが必要であると考えるし、本施設を失うことによる地域の文化や歴史の継承に大きな痛手となることも考慮に入れるべきであろう。遺すことも、地域整備手法の一つとして捉えることも必要であると思われる。

2025年2月27日

私は、地域に残っている歴史資源の価値を共有し、継承していくためには多くの人たちのいまの暮らしとの関わりと物語がつながることが重要だと思っています。宮前町浴場は、まさに現在の地域の人々の暮らしの中にあり、日常の中で夕張の歴史を語り継がれる大事な資源だと思います。当然のことながら、使われ続けることが前提になりますが、そのことも含めて、議論が尽くされることを期待しています。

杉崎和久（法政大学教授）

2025年2月27日

「市営宮前町浴場」の今後を考える官民一体検討会議（仮）の設置を提案します。

（会議メンバー）

市役所の担当部署、宮前町内会長、宮前町浴場利用組合長
一般社団法人清水沢プロジェクト代表理事、歴史的建造物の保存に詳しい学者
NPO法人ゆうばり観光協会理事長など

この検討会議で存続の可能性を1年かけてしっかり検討、議論する。

特に、財源確保について、現実的な方法や採算ラインなどを試算する。

検討会議が出した結論を市長に答申する。

町のみらいに繋がる大切な問題だから行政が一方的に廃止を決定するのではなく、市民も含めて関係者の対話を通じて結論を導く。

単なるお風呂の維持管理の問題ではなく、町の財産の維持管理＝町のみらいの在り方の問題です。

加納 尚明（北海道NPOサポートセンター 理事）

宮前町浴場の存続の願い

令和7年2月27日

札幌市立大学名誉教授・美術家 上遠野 敏

産炭地の記憶を継承している宮前町浴場はいつ行っても気持ちの良い癒しの空間です。行き届いた清掃とステンレス製のたっぷりと深い浴槽に浸かれる幸福感。温泉でなくても心まで洗われる唯一無二の公衆浴場だと思っています。何より、管理人の佐藤咲子さんが磨き上げた浴場の清潔感と癒しを提供する笑顔と人柄に触れたくて地域の方以外にも遠方から訪れる人も多い。

私は空知地区産炭地の各所で11回開催した炭鉱の記憶アートプロジェクトのアートディレクターを務め北炭清水沢火力発電所跡、ズリ山、清水沢駅などを会場に2回、石炭の歴史村遊園地跡で1回開催しました。美術家や札幌市立大学学生が参加して地域の方々と協働して取り組みました。他所から大勢の人々が炭鉱の記憶アートプロジェクトを訪れることにより地域資産や炭鉱遺産の魅力を発信し、地域の方々に価値の再認識をしていただきました。他にも清水沢プロジェクト（佐藤真奈美代表）のズリ山整備、宮前町クリスマスイルミネーション、清水沢駅舎展示、春のお祭りなどで地域の方々と札幌市立大学の学生と共々交流させていただき、その都度、宮前町浴場を気持ちよく利用させていただきました。大規模な集合住宅や商店がひっそりと消えていく中で、宮前町に灯る地域の方々の心の拠り所が宮前町浴場なのではないでしょうか。そして炭鉱遺産の生きた証でもあります。

「無くすのは簡単、残すのは努力が必要」。空知地区産炭地の炭鉱関連の多くの「もの」が取り壊されて「もの・こと・歴史」が消滅しています。現在、残された「もの」は多くの人々が努力をされて保存・活用されています。「歴史を検証しない所に、未来はない」。

人口減少により利用者の激減、浴場施設の老朽化の費用捻出を踏まえて廃止する以外に手立てがないのか？多く人々の手と知恵を借りて、宮前町浴場が地域活性化の拠点となるような方策を考える機会とすることによって逆境を跳ね返すチャンスと捉えることが必要と考えます。

例えば複数の大学と連携して産炭地における施設運用と活性化プランを学生の教育の場として提案してもらうなど新鮮なアイデアから活性化に転じることも可能性があります。21世紀になり既存の施設、既存の考え方を維持継続する方法を改め、浴場以内の人々が集えて飲食も楽しめる軽微な施設を付帯するなど民営のお力もお借りする方法も考えられます。地域以外の人も利用を促進するようなアイデアも出てくることでしょう。宮前町浴場を活用した運用に転じるように多くの方々から知恵をお借りして「まち育て」の地域創生の可能性を育てて欲しいと願っています。

まち文化財産としての「宮前町浴場」の存在意義について

長年、浴場（銭湯・共同浴場）の歴史と実態、その社会的存在意義、およびそこで展開されてきた浴場文化の魅力、今後の地域社会の再構築に益する可能性などを、現場を通して考えてきました。その上で、夕張市清水沢にある宮前町浴場の存否判断の意味合い等について、整理してみました。

【宮前町浴場の特徴】

・炭鉱住宅に付随する入浴施設として建てられ、**建設時の様子と現在の姿が併存して残されている稀有な共同浴場**である。宮前町浴場は、炭鉱の共同浴場が消え続ける中で、元の姿と地域住民に利用されている現役の姿を、時間をこえて同時に体感することができる希少な浴場施設である。

・本浴場施設の大きな特徴の一つが、とくに女湯の浴室にみられる。ステンレス製大浴槽のある現浴室の壁で仕切られた奥に、**浴室の旧構造がわかる部分が残されているのである**。改修の詳しい推移や年代は図面や建築・改修時の資料を見ていないためわからない。あればぜひ拝見してみたい。

・旧浴室にそのまま残る部分は、旧炭住が出来た当時の共同浴場の浴槽や設備の一端を伝える。なかでも**コンクリート製の浴槽**から伝わるかつての浴場の姿は興味深い。

・たとえば**浴槽の深さ**。近年の浴場は全国的に共通して浅めの浴槽で均一化されているが、かつては日本列島を北上するほど浴槽は深かった。全国の銭湯などの浴場に関わった人によると、浴槽の深さの平均値は九州で60cm、北海道では90cm。湯面の面積が同じ場合、浴槽が深いほど湯が冷めにくく、寒冷地に行くほどその原理に基づき深く造られた。

・2021年に百有余年の歴史に幕を下ろした、道内現役最古の銭湯だった小樽の小町湯。その主浴槽は、底面から上辺までの高さ（深さ）がほぼ1mであった。宮前町浴場の旧浴槽をまだ計測していないが、目測ではそれに匹敵する深さと思われる。

・男湯より**女湯の浴室がかなり広い**。炭鉱の共同浴場を利用するのは主に鉱員の配偶者をはじめとする家族。母親は子どもの世話をしながら入るため、それを考慮して女湯の方を広く造った。それは札幌や小樽などの古い銭湯でも見られたが、宮前町浴場では、女湯の浴室の奥を仕切る前は、飛びぬけて女湯の浴室が広がっていたことがわかる。

・また現在の料金徴取所とは別に、**炭鉱の共同浴場として使われた時期の番台の跡**も残されている。銭湯で一般的に見られてきた番台とはまったく異なる配置構造で、共同浴場の特徴の一端を知る貴重なものである。私自身は宮前町浴場で初めて目にした。

以上だけでも、宮前町浴場が他ではすでに見ることのできない貴重な存在であることがわかる。新旧の構造を併せもちながら、今も地域住民の暮らしとつながり続けている姿は、まさに北海道の炭鉱町を代表する夕張に刻まれた、まちで暮らしてきた人々の生活証明ともいえる、かけがえないまち文化遺産である。

【銭湯・共同浴場とまちの将来】

近年は各地で、若い人たちの銭湯への眼差しに異変が起きている。高い年齢層の人たちにとって家風呂がない時代に体験した銭湯生活は、ある意味普遍的な光景であった。だが銭湯は、内風呂の普及を主因にスーパー銭湯や公営温泉などの大型浴場の増加を背景に、昭和40年代半ばをピークに全国でひたすら減少し続けてきた。

1990年代初め、高校生を対象に銭湯体験の有無を調べたことがある。その時点ですら体験者は5%以下。子どもの頃銭湯に連れて行かれた経験もなかったのである。彼らの親の世代がすでに銭湯から離れる日常を送ってきたことがわかる。つまり現在40代から50代以下の人の多くは、銭湯を体感的には知らない世代ということになる。

そんな世代にとって銭湯は、自分の生活とは無縁の過去の遺物。ところがこのところその世代の中に、銭湯に対し並々ならぬ思いを向けるだけでなく、自らその運営に興味を持って行動する層があらわれている。おそらく彼らにとって銭湯は、時代にそぐわない用済みの遺物というより、むしろ現在の閉塞を破る可能性を体現するものと受け止めているようだ。彼らは今、銭湯を再発見しているのではないだろうか。

現に私の周りにも20代から40代の層を中心に、今後銭湯に関わることを目指し、現場で働きながらその機会を探す人たちが少なからず存在する。そういう人たちがあらわれている時に、旧来のモノサシだけで銭湯（共同浴場）を消してしまうのはどうなのだろう。彼らはそこに、さまざまな交流のタネを育むための大きな可能性を見つけたのである。銭湯という場が、これまで日本社会からひたすら欠落してきた部分を補ってくれるのではないかと本能的に感じ取り、積極的にかかわろうとしているようにみえる。

【夕張との個人的つながり】

私の配偶者は、明治期に本町地区で創業した薬局に生まれ育ち、その縁もあって私自身昭和50年代初めから現在まで夕張に通い続けている。以来「まち文化」の視点で夕張の町並みを撮り、機会あるごとに新聞・雑誌などにその特徴ある営みや風景について書かせていただいていた。

ただ私が魅かれた多くのものが消え続け、夕張の町並みの記憶だけでなく、とくに配偶者にとっては夕張そのものの記憶が消し去られようとしている。その中で現在かろうじて残っている町のアイデンティティを語り継ぐ財産の一つが、炭鉱の共同浴場の特徴的な姿を伝える宮前町浴場である。

その浴場について、市から議会に閉鎖の方向が提案されるとの報道が届いた。勉強不足で、これまで宮前町浴場の個性的な空間を生かしたイベントなどの取り組みが、どのように行われてきたのかをよく知らない。ただ個人的には、前述したようにここでしか伝えられない構造を生かしながら、これまでなかった取り組みができるのではないかと、と最初に浴場にふれた時から思い続けてきた。それが未だ行われていないとしたら、宮前町浴場な

らではの、場の力を生かした取り組みを見てからの判断でもいいのではないかと考える。

銭湯（浴場）が、地域の結びつきと活動の拠り所となる事例を目にしてきた立場からも、これまで市内で進めてきた閉鎖解体の流れを、ここでもまたそのまま踏襲するのは、あまりにも勿体ない。

いま夕張が、そして夕張で暮らす人々が、目指そうとする“まちとしての目的地”はどのくらいあるのかと考えながら、書かせていただきました。

2025年2月28日

まち文化研究所 塚田敏信

夕張市宮前町浴場（以下、宮前浴場）を廃止するとの報に触れ、人口減少が進む中でのまちづくりの厳しさ、悩ましさを痛感します。少し立ち止まり、じっくり話し合うことはできないでしょうか。

夕張市は、市内各地区の人口減少と公共施設の老朽化が今後一段と進むとの見通しの下、2022年3月に「公共施設等総合管理計画」を改定し、今後10年間で公共施設の延床面積を15%削減する目標を掲げています。

個別施設については、市内に3つある市営浴場の1つの宮前浴場（1971年築）の統廃合や、市民文化施設である清水沢コミュニティゲート（1973年築）の廃止（解体／処分）などの方針が示されています。

夕張市では炭鉱閉山で人口が急減したことや、炭鉱で働く鉱員・職員の住宅を引き継いだ市営住宅を数多く抱えることになった歴史的経緯もあり、人口1人あたりの公共施設の延床面積が他自治体と比べてかなり多く、その縮減が積年の課題になってきたのは確かです。

宮前浴場については今夏、重油タンクの使用期限を迎え、存続する場合、取り替えが必要になるほか、年々利用者数が減少する中で、毎年約700万円の赤字になっていることも、統廃合の方針を出した要因と思われます。

一方、夕張市は2020年3月に策定した「第2期夕張市地方人口ビジョン及び地方版総合戦略（以下、総合戦略）」において、「新たな人の流れ・関係人口・交流人口の創出」を実現するための具体的な施策として、「清水沢エコミュージアムプロジェクト」を、市北部にある石炭博物館と並ぶ、産業遺産ツーリズムの拠点として位置づけています。

同プロジェクトは、清水沢コミュニティゲートを拠点施設とし、地域住民の憩いの場である宮前浴場についても、北炭清水沢炭鉱（1980年閉山）が稼働していた時代から存続する「生きた炭鉱遺産」として、産業遺産観光の来訪者や清水沢コミュニティゲートで滞在制作を行う芸術家（アーティスト・イン・レジデンス）らの利用に供し、「炭鉱まちの歴史や息づかいを肌で感じられる場所」という価値創造の営みを、10年以上続けてきました。

ここで疑問に思うのは、市が公共施設等総合管理計画を策定する際に、同じ市の計画である総合戦略に位置づけた取り組みが成り立たなくなり、2つの計画が矛盾をきたすといったことにならないよう、なぜ事前の協議や調整が行われないうまま、ここに至ったのか、ということです。

総合戦略は当初2024年度を最終年度としていましたが、2年後の2026年度末に市の実質赤字（≡再生振替特例債）が20年ぶりに解消され、それを受けて財政再生計画に代わる市の最上位計画として、2027年度から始まる総合計画を新たに策定するのを受けて、市は昨年、現行の総合戦略を2年延長することを決めました。

延長した総合戦略には、「一般社団法人「清水沢プロジェクト」と連携し（中略）「産業遺産ツーリズムの構築」を図り、多様な人材の交流を促進する」と記載していますが、宮前浴場を廃止した場合、同法人が構築してきた産業遺産ツーリズムや関係人口創出の取り組みに、著しい影響が出ることが指摘されています。

もっと早い段階で話し合いや調整を行うことはできなかったのでしょうか。もし諸般の事情でできなかったのなら、これからでも話し合いの場や時間を持つことはできないのでしょうか。

宮前浴場が夕張市の産業遺産ツーリズムにおいて大切な施設の一つである一方で、施設の老朽化や利用者の減少による赤字問題もまた、厳然として存在しています。

市営での存続か、それとも廃止か。それ以外の第3の選択肢はないのでしょうか。

老朽化や赤字は頭の痛い問題ですが、間もなく財政再建を完了する夕張市の今後の地域づくりを考えたときに、地域に残る有形・無形の炭鉱遺産という地域固有の資源を生かしたツーリズムは、今後も夕張市の地域づくりの重要な要素の一つであり続けると思います。

夕張市には石炭博物館があり、炭鉱の歴史や文化や遺産を守り伝える上で、こちらも大事な施設です。しかし地域の文化は、博物館の施設の中だけで守り伝えられるものではありません。

地域における日々の暮らしに光を当て、そこに価値を見出し、その価値を伝える丁寧な営みを通して、夕張市の関係人口を地道に創出してきたのが、「清水沢エコミュージアム」です。

私は2016年から2021年まで6年間、所属大学で「夕張を／夕張で／夕張に学ぶ」をテーマとした講義を開講してきました。その間、100名以上の大学生が、清水沢プロジェクト代表の佐藤真奈美さんのアテンドで、地域にお住まいの方の生活を脅かさないように配慮しながら、宮前浴場とその周辺を散策し、炭鉱まちの歴史や文化や地域の自然に触れ、「地域の再生・活性化とは何か」を考えました。

こうした夕張ならではの「産業遺産ツーリズム」「エデュケーショナル・ツーリズム」が今後も継続し、より意義深い形で発展していくことで、夕張市の再生の一助となることを願っていますし、そのために、夕張に心を寄せる多くの人の知恵と思いと力が結集し、よりよい方法を見出していけることを願っています。

2025年3月1日

北海学園大学 教授 西村宣彦

※提出時初稿から誤字等を修正しました。

宮前町浴場存続提案によせて

2025年3月2日

東海大学教授 水島久光

宮前町から清陵町に至る清水沢の炭住の街並みは、今日に至る18年間、私が夕張に足繁く通い続けるきっかけを与えてくれた大切な風景である。

昭和36年生まれの私は、文字通り高度経済成長期に育った。炭鉱に限らず、全国に企業の生産拠点が配置され、その城下町として働く者たちの生活空間が整備されていった。私が少年時代暮らした東京葛飾にも、三菱製紙金町工場の巨大事業地とそれを囲む都営住宅群があり、私が通った小学校はそのど真ん中に新設された。櫛の歯のように同じ形状の共同住宅が並ぶパノラマは、私にとっても原風景といえるものだ。

その都営住宅にも風呂はなかった。代わりにそこここに公衆浴場が設けられていた。事業地と住宅の間を風呂、商店、学校、公園がつなぎ、徒歩圏内で完結する地域コミュニティが形成されていたのだ。しかし時代が変わり、製造業の情報化とグローバル化とともに、こうした市民生活の生態系はいつの間にか消えていった。財政破綻直後の2007年、初めて清水沢を訪ねた私には、だからこそこの風景が実在していることに率直に驚いた。

それは単なる郷愁を超え、社会史的価値を予感させるものだった——地域／生活／産業／映像／記憶／コミュニケーション…私のその後の研究テーマとなる「文化とアーカイブ」の構成素が全て揃っていた。中でも浴場は、炭鉱にとって大きな意味をもつ。鉱業所の中のそれは地下と地上の二つの世界が交差する「結界」であり、街場のそれも掘り出される石炭の恵みを象徴する特別な場であった。

風呂付きの家が増えても、公衆浴場に通いたくなるのは、おそらくこの町の人々の身体に、そうした価値体験が刻み込まれているからだだろう。互いに肌を晒し、自分たちが「何故に生きているのか」を確認し合う——入浴の儀礼性は、古を語る民俗学の中に封じ込められたものではなく、産業社会のエコロジーの中にも息づいていたのだ。宮前町浴場は昭和46年に誕生。炭都夕張の最後の希望「新鉱」の運命とともにあったという点でも、物語性がある。

地域史を語る上で、「遺構」として何を残すべきかという議論は、産炭地に限らず全国で盛んである——しかし間違えてはいけない。宮前町浴場は「遺構」ではない。今もこの町の人々の暮らしとともに「生きて」いるのだ。その継承はいわゆる「動態保存」と同じ意味を持つ。過ぎた時間をオワコンとして奉るのではなく、そのアクチュアリティに学ぶべき何かがあるとの確信を抱いて、未来につなぐのだ。産炭地の暮らしにはその価値がある。

財政再生計画のゴールは見えてきた。しかし、その先の未来について語るべき何かを、この20年でしっかり積み上げてきたと、胸を張って言えるのだろうか。私は協働する研究者たちと、この一つの節目を目標に、夕張は全国区の「石炭のまち」として、何を歴史に記すべきか、資料を読み返し考え続けている。そしてそれを世に問う用意が整ったとき。数多の住民がそうしたように、宮前町の洗い場で汗を流し、思いを重ねたいと夢見ている。

夕張市長 厚谷司様

2025年3月1日

北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 博士後期課程
日本遺産「炭鉄港」地域活性化戦略検討会議 委員
鈴木里奈

- ・夕張市宮前町浴場については、紙面の都合上、宮前浴場と略して記載しています。
- ・この文章は、所属組織を代表するものではなく、あくまで研究者個人の見解です。

宮前町内会、宮前町浴場利用組合、一般社団法人清水沢プロジェクトの三者が掲げる提言のうち、「生きている炭鉱遺産」としての価値、そして交流施設としての価値の項目について補足いたします。

【資料】北海道炭礦汽船株式会社『七十年史』より

北炭が設置する浴場は、1940年ごろから集会場と併設されるようになり、そのコミュニティを支える役割を果たしてきました。北炭『七十年史』には、浴場と集会場を併設する狙いが明記されています。

「十二年以降住宅の増加とともに、在来の浴場ではこと欠くに至ったので、部落の中央に延百坪以上の二階建浴場を建設し、その二階を集会場として冠婚葬祭などの行事に利用できるよう一石二鳥の効果をねらった」（北炭『七十年史』p.654-655）。

この記載は、宮前浴場の設置前である1940年前後の様子ですが、実際に宮前浴場は集会施設を併設しており、従来の北炭が設置した施設同様にコミュニティを支える役割を果たしてきたことが推察されます。

また、1957年度末の集計から、北炭夕張鉱業所の管轄区域（第二、第三、清水沢礦）に合わせて35の鉱員共同浴場と12棟の職員共同浴場が設置されており、対象人員となる鉱員の数は34,376人におよびます（北炭『七十年史』p.655）。こうした数字からも、浴場は、炭都夕張の生活と文化を象徴する存在であることが理解できます。

【無形文化遺産としての価値】炭鉄港との連携を見据えて

21世紀に入り、文化遺産の関心は「有形」の遺構のみならず、「無形」の記憶や文化、地域独自の風習に向けられています。

無形文化遺産は、2003年のユネスコ総会において採択され「口承による伝統及び表現、芸能、社会的慣習、儀式及び祭礼行事、自然及び万物に関する知識及び慣習、伝統工芸技術といった無形文化遺産」の保護を目的としています（文化庁HP、傍線筆者）。

炭鉱は、遺構だけでなく、労働者の記憶、労働者の生活や食の文化、祭りの風習など、無形の文化遺産が豊富です。浴場文化も、炭鉱の生活を象徴するものであることを、上記の【資料】で確認いたしました。

2011年には、炭鉱労働者である山本作兵衛の絵画が「世界記憶遺産」に登録されたように、炭鉱町の記憶や文化、風習を後世に伝えようとする試みが盛んです。しかし、これらは記憶や記録に依拠する 경우가多く、現在も地域の中で持続的に残っている例は大変貴重であり、浴場として運営する形式を取ることで、その価値はさらに高まります。さらに、日本遺産「炭鉄港」と連動する形での活用の可能性も、十分にあると考えられます。

【利用者（観光者）の声】観光・交流の観点からの浴場存続の意義

こちらは、筆者がヒアリングを行った入浴者（観光者）の声です。初めて夕張市を訪れたという二人がどのような感想を持ったのか、浴場閉鎖の方針を伝えたくて、文章で感想をいただきました。

利用者 A（清水沢まちあるき参加後に入浴／30代前半／女性／大阪府出身）

「ステンレスの深い浴槽、おばあちゃまがいらして、3人であつ〜い湯の中でぼつりぼつり言葉を交わしました。シティー育ちの私は、浴場で知らない人とお話した経験があまりなく、明るい風呂場で新鮮な気持ちになりました。地元の方の日常と旅人の非日常とをつなぐ、あたたかな社交の場にもなっているのではと思いました」。

利用者 B（清水沢まちあるき参加後に入浴／30代後半／男性／熊本県出身）

「公衆浴場が単なる入浴施設ではなく、地域の人々が集い、語り、暮らしの一部となっている大切な場所であることを実感しました。そこで交わされた何気ない会話や、湯上りの心地よいひとときが、地域のつながりを支えていると感じました。地域の歴史や文化を守ることは、夕張市の未来にとっても重要であると感じます」。

最後に、清水沢コミュニティゲートに滞在したことがある人間として、筆者の個人的な意見を述べます。私は、2017年あたりに合計で5泊ほど利用しました。炭鉱住宅に滞在するという貴重な経験をするにあたり、必要になるのが入浴施設です。宮前浴場があることで、衛星的な面の心配が不要になりました。さらに、浴場で出会う地域の方々と話をするなかで、夕張の実情を聞くことができ、夕張への知識と活動の接点を広げる機会を得られました。私たちのような外部から来た人間が交流できる機会は非常に限られており、その貴重な機会が、浴場での交流であると感じました。

以上から「生きている炭鉱遺産」としての価値、そして交流施設としての価値が証明できることと存じます。住民の声を反映し、存続の道を模索できるよう、願っております。

夕張市宮前町浴場について

昭和 46 年に北炭によって開設され、炭住エリアに炭鉱会社が開設した浴場としてはおそらく道内最後である宮前町浴場存続を願う立場で、(一社)清水沢プロジェクトに賛同するとともに、一言メッセージを添えさせていただきます。

この浴場は、内風呂のなかった炭住に暮らす従業員のために、会社が開設したものであると伺っています。炭住とは、「企業が自社の従業員の衣食住全ての面倒を見ていた」時代の名残であり、かつて未開の原野を切り開いて炭鉱を開く上で、衣・食・住全てを備えた居住区として整備され、従業員が安心して働けるようにするために不可欠なものだったと推察します。

そのコンセプトと精神は、同じ北炭が作り上げた室蘭の製鋼所・製鉄所にも受け継がれており、室蘭の社宅街もまた同じコンセプトで作られてきたことが伺えます。

私は室蘭にかつてあった、新日鉄港北社宅の生まれですが、新日鉄の社宅街も炭住と同じく、「住」を担う住宅としての社宅と浴場、「衣食」を担う購買機能としての店舗、文化や交流を担う「会館」、子どもたちを育てる「企業立の幼稚園」などが地区内に網羅され、ある種のコロニーを形成。そんなコロニーが企業ごと、各地区に築き上げられ、独特の社宅文化をベースとした市民性を育んできました。社宅街でのくらしは、室蘭市民のふるさと・原点そのものであり、その名残は、日本遺産「炭鉄港」の構成文化財「工場景観と企業城下町の町並み」として認定されているところであります。

残念ながら現在の室蘭には、そんなコロニーの要素としてあった浴場は残っていませんが、そのルーツである夕張の炭住地区に残されているとお聞きして、その貴重さを考えたときに、これは夕張だけでなく炭鉄港エリア全体のふるさと、宝であると考えられ、炭鉄港の構成文化財に追加すべき文化財なのでは、と感じた次第です。

宮前町浴場はただの文化財に留まらず、今なお現役の浴場であります。それは、日本遺産「炭鉄港」で保護しているストーリーの一端である「炭住での暮らし」を、今なお実際に体験できる施設であるということであり、「体験できる炭鉄港」として大変重要な要素となり得るのではないかと考えます。

財政難の折、また内風呂の普及で「公衆衛生」の観点から施設としての役割は終えたとのご判断は理解できますが、「炭鉄港」に直結する生活史遺産、文化遺産としての役割はまだまだ果たすべき施設と考えますので、是非、「体験できる炭鉄港」としての存続されますように、心より希望いたします。

令和 7 年 3 月 2 日

山田 正樹

室蘭てつのまち振興会 代表
(一社)むろらん 100 年建造物保存活用会 副代表理事
(炭鉄港登録ガイド)